

名著

心に触れる

『袋小路の男』

糸山秋子著

著者の糸山秋子は1906年生まれ。パブルのただ中、「男女雇用機会均等法」の第一世代として働いた経験がある。この法律により、女も男と同じように働ける仕組みが整ったが、問題は心がこがした枠組みとそれだけ運動したかである。

辛

早稲田大准教授 阿部 たくま
シオ英語で読む村上春樹」講師を務めた。

阿部 たくまは、吉本ばななさんの『キッチン』は文章

なりがちな現存る効果ももたら

「袋小路の男」は糸山秋子の初期の代表作。高校の先輩との12年にわたる切ない片思いが、女の声で語られる。物陰に身を潜め、じつと好きな男を見つめ続けるばかりの「私」。名前がわからない。誰からも名前を呼ばれない。でも、心の中では強く叫ぶ。「そんなのあなたじゃない」「格



袋小路の男

糸山秋子

※2004年刊。現在は講談社文庫(400円)

「待つ女」を演出し主導権

好悪すぎる「やめて」と。奥手で古風。思いだけは人一倍強い。だからマイペースの男に翻弄される。典型的な「待つ女」。

でも、少し変なのだ。演歌調の恨み節から逸脱する別の「声」も聞かせる。鋭い洞察や意表を突くセリフ。むしろ「待つ女」を演出しておいて、そこからズレて読ませる。

実は「私」はめつぼう酒が強く、好んでウォッカなど呑む。愛車はガンメタのゴルフ。男が入院したときは、高速道路をものすじいスピードで飛ばし、関西か

ら見舞いきた。まろい男勝り。

この小説では「あなた」と呼ばれる男を主役に押し立てておいて、「あなた」よりもずっと男らしいこの「私」が、こっそり主導権を握っているのだ。

女でもあり男。魅力的な人間ほど両方を併せ持つという。こういう人には世界の機微がよく見える。著者はその後、性別問わず様々な人間を描いてきたが、与えられたキャラクターから微妙にズレるのが彼らの魅力でもある。

男女とも新しい役割を模索し始めた現代。だからこそ誰もが「もう一人の自分」に気づき始めた。今までは違つ男女を描くこの作家はまさに時代の申し子なのだ。(阿部公彦・英文学者)

本よむをく

書・柳 莫山



本を読もう

本の値段は税抜きです